知的障害のある人の語るライフストーリーからみた障害の自己認識
−社会モデルの解釈を用いて−

○　青山学院女子短期大学　　氏名　杉田穏子（2873）

：知的障害,障害の自己認識,社会モデル,ライフストーリー

１.研 究 目 的

知的障害のある人の中には,障害を自己認識している人もいるが,していない人もいる.それはなぜか.本発表では,社会モデルの解釈を用いて知的障害のある人の語るライフストーリーから障害の自己認識の有無を明らかにしようとするものである.

２.研究の視点および方法

欧米では,知的障害のある人の障害の自己認識に関する研究が1980年代より今日まで行われている.これまでの研究から障害の自己認識の有無は,他の別の要因と相関がないこと,どの研究からも障害の自己認識を否認する人が必ずいることが報告されている.障害の自己認識の否認を巡って,これまで個人モデルの解釈を用いて,障害とはその個人に張り付いた欠陥で,気付いても「ふつうを装い」隠さなければならない否定的なものとされてきた.これに対して,「社会モデル」の解釈では障害の自己認識は「場合によって認めたり認めなかったりするアイデンティティ管理」と捉えられている(Rapley ら 1998).また Rapley (2004:119-20)は「ふつうを装う」ことは,日常の社会生活のよくある特性で,知的障害のない人との共通点であるとする.このような考えに基づき,Rapley ら(1998)は「ふつうを装う」ことで否認している場合の語りの特徴「他者の認識利用」(2004:120-30)と,「有能さの構築」(2004:130-8)を見出している.「他者の認識利用」とは,「回答者が自分の位置取りについての証明……として他者の認識を利用する」ことで,インタビューでは「認識(例えば「彼らがそういうのは,私が障害をもっているからかもしれないわ」)」とそれに対する「倫理的評価(例えば「でも,彼らがどう思っているか気にしない」)」の組み合わせによって語られる.また「有能さの構築」とは,自分がいかにふつうに社会に溶け込んで生活しているかを強調することによって語られる. 本発表ではこのような社会モデルによる障害の自己認識の否認の解釈の視点にたって分析を進めた.

研究の方法は,知的障害のある人へのインタビュー調査で一対一で実施した.インタビューでは,これまでの人生の出来事について自由に話してもらった.さらに障害の自己認識について「あなたには障害があると思うか」と問い,「ある」と答えた人には「どのような障害だと思うか」,「いつ頃,なぜ障害があると思うようになったのか」を尋ねた.一方「ない」あるいは「わからない」と答えた人には「障害のある人とはどのような人だと思うか」という質問を行った.また必要に応じて同じ人に2回または3回インタビューを行った.

３.倫理的配慮

対象者には,インタビューは研究目的であることを事前に施設を通じて本人に知らせ,施設名,名前を明らかにしないことを約束している.

４.研 究 結 果

インタビュー実施者は 104 名であるが,障害の自己認識の否認／認識理由が語りから読みとれると判断した 13 名をとりあげた.そのうち,障害の自己認識について直接尋ねた質問に対して「ある」と語るのは 4 名,「わからない」と語るのは 2 名,「ない」と語るのは 5 名,残り 2 名は語りに変化がみられた(「ない」→「ある」,「ない」→「乗り越えた」).

５.考 察

13名中A,B,C,Dさんは,「障害がある」と語り,障害を自己認識していた.A,Dさんには肯定的障害観の語りがみられた.B,C さんは障害を自己認識していたが「ふつうを装う」語りの特徴「他者の認識利用」,「有能さの構築」がみられた.

13 名中 E,F さんは,「わからない」と語るが「学業成績による評価」や「特別支援学級・学校への配属」によって障害を自己認識していた.障害を自己認識した上で,日常生活でであう社会の知的障害のある人への取り扱いに対して傷つき,否定的障害観をベースにしつつ,知的障害がある／ないと「分類することへの疑問・怒り」をもっていた.

13 名中 G,H,I,J,K さんは,「障害がない」と語る.G,H,K さんは「ふつうを装う」語りの特徴「他者の認識利用」「有能さの構築」がみられた.つまり「障害はない」と語るが障害を自己認識していた.I,J さんは「ふつうを装う」語りの特徴がみられず,自分の問題は「腎臓病」や「親による虐待」と語った.I,J さんは小さい時から知的障害のある人のみの集団で育ったため却って障害を自己認識していなかった.

13名中L,Mさんは語りに変化がみられた.Lさんは1回目は「ふつうを装」い否認したが,2回目で障害を認識している語りをしている.M さんは１回目は「ふつうを装う」語りの特徴「他者の認識利用」が見られ,2 回目では知的障害がある／ないと「分類することへの疑問や怒り」を語っていたことから,2名とも障害を自己認識していた.

以上のように,13名中11名は障害を自己認識しており,認識していないのは2名だった.障害を自己認識していた11名中4名(G,H,K,Lさん)に「ふつうを装う」語りの特徴が見られた.また「障害がある」と語った 2 名(B,C さん)にも「ふつうを装う」語りの特徴が見られた.これらの人は知的障害も自分自身も否定的に認識していた.一方,障害を自己認識していなかった 2 名(I,J さん)は,社会的養護にも支援が必要な人たちで,「本当に」知的障害を自己認識していないこと,知的障害を認識しにくい特別な社会的環境にあることが示された.

・Rapley M., Kiernan P. and Antaki C. (1998) Invisible to themselves or negotiating identity? The interactional management of ‘being intellectually disabled’, Disability and Society ,13, 807-27.

・Rapley M.(2004) The Social Construction of Intellectual Disability, Cambridge University Press.

本研究は平成 28 年度科学研究費助成事業基盤研究(c)(課題番号 26380825)「知的障害のある人の語るライフストーリーと障害の自己認識の関連性に関する研究」によるものである.